

肥育における前期および後期飼料の切り替え法の違いが採食量、 増体量および健康状態に及ぼす影響

池田博文

緒言

肥育牛管理では肥育中の前期飼料から後期飼料へ切り替える場合、急激な切り替えは下痢をともない増体量の低下につながると言われ、一般的に1ヶ月間をかけて段階的に切り替える方法で行われる。これまでに入来牧場でもそのような方法で肥育を行ってきた。しかし、この方法では多くの労力を要している。

本調査では、これまでの健康状態を維持しながら、体重の増加を落とさず、いっきに前期飼料と後期飼料を切り替えることの可能性を検討し、肥育牛管理の省力化をはかるための資料を得ようとした。

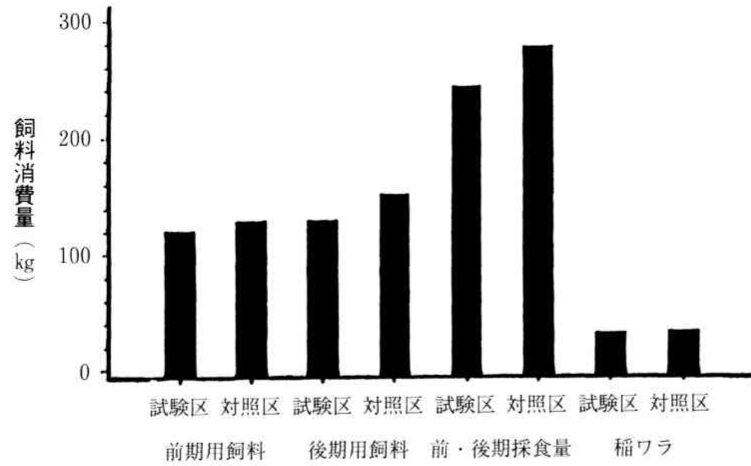
材料と方法

試験1では入来牧場で生産された黒毛和種去勢肥育牛を用い、肥育開始後7カ月目の牛を試験区に9頭、対照区に8頭を用いた。試験2では試験1と同様な肥育ステージにある黒毛和種雌牛で、試験区に8頭、対照区に8頭を用いた。試験1及び試験2とも、試験時期及び期間は同様とした。試験区の餌給与は前期飼料と後期飼料をいっきに切り替える方法とし、対照区では慣行の給与法とした。調査は、増体量、前期飼料採食量、後期飼料採食量及び稲藁採食量について行った。

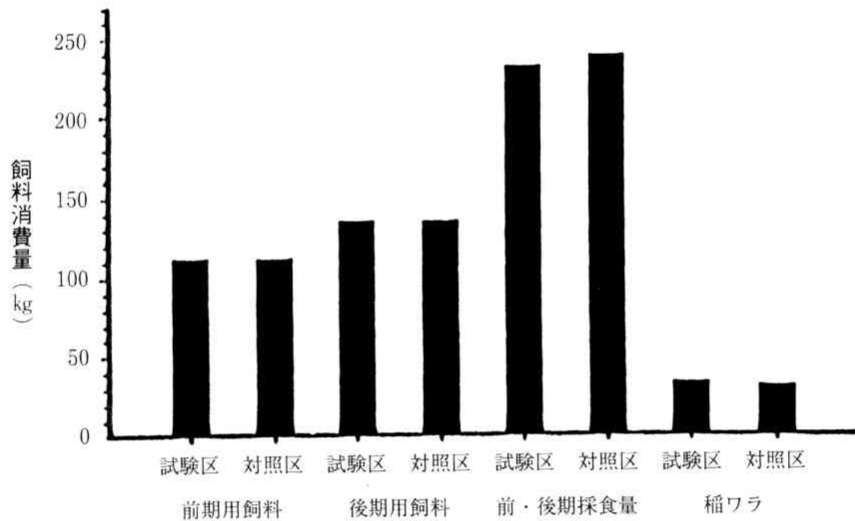
結果と考察

濃厚飼料の消費量は去勢牛及び、雌牛とも対照区は多く、試験区では少なくなる傾向を示した。稲藁の消費量は去勢牛及び雌牛とも差は認められなかった(第1図、第2図)。1日増体量(DG)は去勢牛で試験区が有意に高い値を示した。しかし、雌牛では試験区で高い傾向を示したが有意差は認められなかった(第3図)。また、試験区では去勢牛、雌牛とも健康状態に異常は見られなかった。

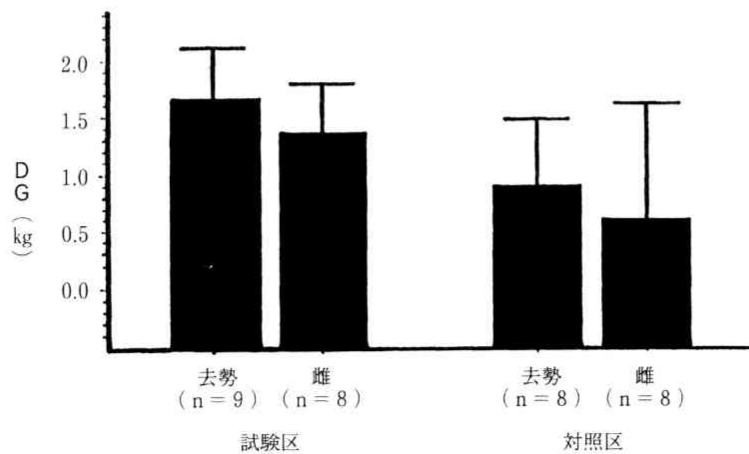
以上のことから、DGのみで判断すれば、前期飼料と後期飼料をいっきに切り替える方法は有効な給餌法であると考えられた。しかし、その後の肉質にどう影響するかは、今後検討する必要がある。



第1図 肥育牛の前・後期飼料切替法による飼料消費量の違い (去勢)



第2図 肥育牛の前・後期飼料切り替え法による飼料消費量 (雌)



第3図 黒毛和種肥育牛の前・後期飼料切替法によるDGの違い